

皆さま、今日はお集まりいただきましてありがとうございます。私といたしましては今日このような形で東京におきまして、すなわちアジアにおきましてボイスについて話をできることを非常にうれしく思っております。

私の今回の話、ボイス・シンポジウムにおきましては3つの部分から、このシンポジウムを作っていくたいと思っております。ここの図に書きましたように、このような絵を、イメージを頭の中に想像しておりますけれども、一番左側の部分これが今日の部分にあたります。そして真ん中の部分が明日です。丸い部分が明後日というように予定しております。ほんとはここで黒板が欲しかったんですが、残念ながらここには黒板がなく、こういうホワイトボードしかありませんので、これを使って説明させていただきます。

この3つの部分は、いわば重層的に重なり合っておりまして、本日はそのボイスの芸術概念というものがどういうふうになっているか、そして、それがどのように始まったかということを取り上げたいと思います。この関係でもって、まず彫刻の本質というものはどのようなものであるか、それを明らかにしていきたいと思います。そしてボイスが彫刻とは何であるかということを行っていますけれども、この質問から出発いたしまして、この理論、彫刻の理論というものを問題にいたします。第2部といたしましては、一種のアクションとして、このことを目に見える形で皆さまにお伝えしたいと思っております。

ここに書きましたこのイメージ、この図というものは、ある意味では年代記ふうに捉えてくださって結構です。それと私がここで話すものとは重なっております。まず明日ですけれども、まず明日何をするかと申しますと、この第2部といたしましては、教師としてのヨーゼフ・ボイスを扱います。と同時に、教育というものが芸術であると、芸術としての教育、これを取り上げます。私はボイスの生徒といたしまして長い時間を共有してまいりました。そして、そのおかげでデュッセルドルフの芸術アカデミーというものはどのようなものであり、ヨーゼフ・ボイスがそこで何をやってきたのかということを知っております。そこで、この関係で拡大された芸術概念というものがどのように生じてきて、そしてそれが最終的には政治活動というものとどう結びついていったか、その辺をお話したいと思っております。

そして、3日目の日曜日には、社会彫刻というものを問題にいたしますけれども、これは社会彫刻だけが問題ではありません。3番目の部分では、1と2の部分を含んでおります。1と2の部分がいわば展開して行って、集約的にこの第3のところすべての姿を現していくわけです。その全体を社会彫刻という概念でもって捉えていきたいと思っております。

それでは、私がこれ以上話をする前に、まずだいたいのイメージをつかんでいただくためにスライドをお見せしたいと思います。よろしくお願いします。

これがヨーゼフ・ボイスです。これから3日間私たちが取り扱おうとしているテーマの中心となる人物です。

まずここに最初にお見せしましたこの図ですけれども、今のところ抽象的な感じにしが見えないと思いますが、しかしこれから3日間話している間に、その内容が出てきて、皆さんのもとの伝わるように、そのように希望しております。

今書きましたこの図ですけれども、3日間このままここに残しておきます。

その次ですけれども、申し上げたいことはこれは個人的なことなんですけれども、私はデュッセルドルフ、ドイツからはるばるここ東京までやって来ました。

ここにデュッセルドルフがあります。ここが東京ですね。

一昨日私は飛行機で来たわけですが、10時間です。非常にシヴィアです。こちらは、要するにデュッセルドルフの方は西で、東京は東です。

もし歩いてこれれば、一番良かったと思っております。

でも、そんなことをしたら、もっともっと長い時間かかったと思います。

ここに書きましたこのところ、これが土です。

ですから、かなり抵抗があるはずです。

ですから、本来でしたらこの地上からくる抵抗を自分の力で何とかしなければいけなかったはずなんです。

ですからもし私がここまで歩いてきたといたしましたら、どのくらい時間がかかったか分かりませんが、いわば私はそれまでに仕事を済ましております。そうしますと皆さんの前で特に話す必要はなくなっていたのではないかと思います。

このように歩くということには当然長いエネルギー、力というものが非常にいるわけですね。それによって大地というもの、あるいは地球というものの抵抗を私は何とか克服しなくてはいけなかったわけです。それには意志という力が必要になってまいります。

そしてこれに来るまでに、動きというものには当然ながら熱エネルギーが関わりますので、それまでにエネルギーというものをここで展開してきたことと思います。

いわば精神的な熱のエネルギーです。

そしてこの歩いてくること自体がアクションとなり得たであります。

そしてこの歩いてきたこと自体が、目に見えない彫刻、私が成し遂げた目に見えない形の彫刻となったはずであります。

でも私は歩いてこないで、申しあげましたように飛行機に乗ってまいりました。

ですからこの歩いてくれば当然得られたはずのこの熱エネルギー、あるいは熱の本質というようなもの、こういったものを別のやり方で何とか私は自分の中に作っていかなければいけないわけです。

私は歩いてくれば当然得られたであろうようなこの経験というものを、精神的な領域において何らかの形でトランスフォームしていかなければいけないわけです。

西から東へ私は何らかの形で移動したわけです。

しかしながら、私は西から東にまいりましたけれども、東に住んでいらっしゃる皆さま方は何らかの形で私の方に近寄っていただかなければいけない面もございます。

そして、昨日東京に来る途中この辺りで太陽が昇ってまいりました。

太陽はこのような方向に上ってきたわけです。

これが私の申しあげる、私の方に向かってきていただけるイメージの1つの図柄です。

では、次のスライドをお願いします。

これは、1968年のボイスの作品で、「アース・テレフォン」と題されております。

こちらにも電話があります。

電話線はこの地下を通っていつているわけです。

ですからこの電話と電話の間には、大地があるわけです。

ここまでが私の導入部分です。

これからお話するのは、ボイスのいろいろな段階があるわけですが、時代によって、その段階の中でも非常に重要に思われることです。どのようにして、ボイスが彫刻概念というものにたどり着いたかということでもあります。その中心にありますのは、現代 20 世紀における人間の役割というものが中心テーマとなってまいります。

また、ボイスの仕事に関しまして今申し上げましたことが、なぜ非常に重要か、また興味深いかと申しますと、ボイスは自然科学に非常に取り組んできたからであります。ですからこの問題というものが非常に重要な意味を持ってまいります。

この自然科学というものは、主に量に関係しておりまして、分析という方法を使います。ここでは、空間と時間ということは問題になりますけれども、自然科学におきましては、空間と時間は問題になりますが、人間というものはこの中に入ってまいりません。

自然科学が問題にいたしますのは、物質と物質の関係、あるいは物質そのもののあり方でありまして、それを分析するに当たりましては、合理的な理性というものを使うわけです。

そしてそれを合理的に把握するために、技術的な手段というものが用いられるわけです。その 1 つの例がこの電話という発明です。

このような自然科学に関して持ちます意識というものは、一種の一方通行的なもので、物質ないしこの地上的なものに縛られている、そういう意識です。

すなわち、物質、これが空間と時間の中に置かれているという関係、これが根本にあります。

そして、このような背景に基づきまして、ボイスは一体人間とは何であるかということ問うたわけです。

そこでヨーゼフ・ボイスが用いましたその方法論というものは、厳密に物事を捉えようとするやり方でありまして、まさに自然科学のやり方ですけれども、この場合にはいわば信仰というような、ものを信ずるといような、そういう心の動きではなくて、意識のレベルにおける厳密な理解ということでもあります。

ヨーゼフ・ボイスが一番最初になした一番大きな体験というものは、これは戦争の前になされた体験ですけれども、ドイツの彫刻家、ヴィルヘルム・レーンブルックの彫刻

の写真でありました。

この写真を見ましてボイスは、直感的につかんだわけですが、自分が探しているものこれは芸術を通してしかなし得ない、この直感がヨーゼフ・ボイスのその出発点であります。

そして第2次世界大戦がその後やってまいりました。そしてボイスは、まず最初には自然科学の勉強を始めたわけなんですけれども、じきにこの自然科学というものの道を通りましては、人間とは一体何であるのかという問いに答えることができないということに気が付くわけです。

そしてボイスの戦争体験というものは、破局というものでした。戦争は破局をもたらす、そして、人間は一体作る、どんな地点にまで来てしまったのだろうかということを実に表しているのが、この戦争という状況だったわけです。

このボイスが持ちました感想は切実なものになっていったわけなんです、この戦争の話、体験のことは簡単に切り上げて、私の話を進めたいと思いますけれども、結局はボイスがこの彫刻というものを通じまして、この最初の出発点、あそこにどういふふうにと束縛していったか、ここにその注意をどのように向けていったか、その道のりのことを問題にしたいと思います。

戦後直後に、ボイスはデュッセルドルフの芸術アカデミーにおきまして彫刻を勉強し始めました。

しかし、この段階におきましてボイスが一番に関心を持っておりましたのは、この道を通じて、私は人間とは何かという問いにどうやって到達できるだろうかということでありました。

彼自身は、この間に非常に大事なことなんですけれども、彫刻というものを作りながら、それと平行して、いったい彫刻とは何かということを考え続けたわけです。その彫刻の行き着くところ、その本質というものは一体どこにあるのか、この問いを常に持ち続け、それを問い続けたところでもあります。

では、これから3つの初期の作品をスライドでご覧に入れます。これは50年代初めの作品でございますけれども、この時期に一体、ボイスがその問いを心に持ちながら、どのような仕事をしていったのか、それをまず見ていただきたいと思います。

なぜ、この話をするかという、これはちょっと分りにくいかもしれません。およそ彫刻とは何かという問いを発する場合には、何となく分かりきったような感じがいたします。これは、一種の人間が作り出しました3次元の存在であると。その問題に収

束するわけですがけれども、ボイスの場合ちょっと違うと思いますので、分りにくいかもしれません。

後にヨーゼフ・ボイスは、しばしば逸話のような形で語ってくれたんですがけれども、先ほどのような形式的な、形のある 3 次元の存在というような答えでは満足しないと。そこで、アメリカのエアート・ラインハートという人の言葉を引用しまして、彫刻というのは絵を見るときに自分の後ろに立っている何ものかであると、後ずさりしようとする、それで躓いて、ひっくり返ってしまうようなものである、そういう言い方をボイスはよくやっておりました。

ボイスが問題にしていたのは、彫刻の本質とは何かということでありまして、外側から見た定義ではありません。外側から見た定義というものは結局は、いわばスタイルの問題としてよく捉えられます。あるいは、美術史の問題として捉えられてしまいます。これはエジプト的な彫刻である、あるいは、これは日本の彫刻である、中国の彫刻である、というふうに言われてまいります。しかしながらこのような外側からの定義には、ボイスは全然満足しなかったわけで、彫刻の本質的な一番核になっている部分は何かというのが、ボイスの問いの中心にありました。

次の写真をお願いします。

これは 1950 年代初頭の作品で、作品名は女王蜂、女王蜂 I となっております。

大きさはだいたいこのぐらいですね。

ちょっと説明させていただきますと、この上に載っておりますのが、蜜ろうです。そしてこの蜜ろうの下にありますのが、木の板ですね。

ご覧になるとお分かりになると思いますけれども、この木の板のほうも、ボイスが少し手を加えておりまして、少しこのように丸くなっております。

そしてこの上に、このような蜜ろうが載っかっているわけですね。

ご覧になってお分かりになるかもしれませんが、この作品はいくつかの層からできております。一番下はこのような木ですし、その上にまた蜜ろうがあり、さらにその上にまた蜜ろうが載っていく、そのような多層構造になっております。

本来は、この木の板ですがけれども、この作品にちょうどくっついたような形で、統合されているというふうに申し上げます。

ここのところに境界線となっているところが見えると思います。

そして、この大きさですけれども、形から見ましても、いろいろな形、いろいろな層になっていることが分かると思います。

こちらに見えますこの右側ですけれども、これは女性の像になっております。頭のない女性の像ですけれども、木でできておりまして、非常に、フォーム形成から言いましても、かなり発達したというか、かなり仕事をした状態でこの上に載せられています。

そしてこちらに見えます、横になっている像ですけれども、こちらも女性の像で、こちらの方はかなり大きな丸い頭が付いております。そして、この2つの女性の像がこういうふうな右側の角をつくっているわけです。

ここに下にありますが、3つの蜂の図柄であります。

この真ん中のところにきている像ですけれども、まだ柔らかくて、それ自体きっちりとしたフォームをまだ持っておりません。まだまったくでき上がっていない、まだこれから動いていく、そんな印象を与えます。

これをご覧になると思い出される方もあるかと思いますが、昔子供のころ、こういうワックスで遊んだ方も多いのではないのでしょうか。例えばですね、熱いときには、このワックスというのはポタポタ落ちてくるわけです。指に落とすと熱くて大変なんです、すぐに冷たくなって固まります。

まあ、これも1つの形を取っているというふうに申し上げられますけれども、先ほどの蜂や女性の像と比べますと、ほとんどまだそれほどはっきりとした輪郭が見えません。この上の所ですけれども、こちらの方はまるでケーキのようにも見えますし、他のところの形は、そのケーキを食べているような、そんなふうにも見えます。

ご覧のようにですね、この作品で明らかになりますことは、さまざまな形、フォームというものを取っていく段階というものが、この1つの作品の中に表されているということです。例えば、先ほど申しましたような部分というのは、まだこれから形を取っていく混乱状態である。かなり完成した図柄も入っております。一番上のところは、いわばへりの部分ですけれども、ここはそのまま物質そのものが姿を見せているわけです。

もちろんこれ全体が彫刻として、1つの完成体ではありますけれども、同時にどうやって作られていくかという過程というものを表しております。すなわち、この彫刻というものはそれぞれの段階を経て、どういうふうにフォームをなしていくか、それが1つの彫刻として提示されていると考えていただければいいわけです。

ですから、彫刻はどのようにして成立するかということを示した彫刻である、とそう考えてください。

というわけですので、ここではさまざまな層というものが重視されています。さまざまな層と申しますのは、一番下にあるのが、これが木ですね。木というのは、彫刻の素材としては最も古いものです。それからその上に、このろうの層がありまして、そしてそこでパノラマを示しておりますけれども、さまざまな層というものを重視しております。この層というものは、進化の過程というものと関係があります。進化は、常に皆さんご存じのように層をなしております。つまり考古学の地層のことを考えていただければいいわけなんですけれども。

この真ん中の部分をちょっと注意してみてください。

なぜこの部分に注意していただきたいかと申しますと、次に同じような過程を経てできました作品、女王蜂Ⅱをお見せしたいからであります。

先ほどと同じように、やはりまず木の一番下の構造がありまして、その上に蜜ろうで作られた図があります。そしてあの部分に女性像が斜めに入っております。角度が先ほどとは違います。

ここでは、先ほどよりだいぶ先にいった形態を取っています。まずこの真ん中の部分を見ていただきますと分かりますけれども、この蜜ろうの部分というのは明らかに先ほどとは違って、他の蜜ろうの部分と画然と分けられています。すなわち先ほどは、まだ周りに他の蜜ろうがありましたけれども、今回の場合には、その余計な蜜ろうがなくて直接木の上に置かれています。いわば、この部分が自分自身を独立させ、解放しているんだと考えていただければいいと思います。

この図を見ていただいて一番上の部分に注意していただきたいんですけれども、先ほど、ろうの枠になっていたものが今回木になっております。この木というものは、もともと、ろうに比べてはるかに硬いものでありますし、また進歩したものであります。木というのはそれ自身が成長していき、またそれ自身が生命を宿すというものであります。

さらに注意していただきますと、だいぶ先ほどよりも進んだ状態であることが分かると思います。まず全体としては確かに形は、フォームをきっちり取っていません。部分的には、素材というものがはっきりしております。途中で穴のような形がありますけれども、ここからさまざまのものが、いわばこぼれ落ちております。そのこぼれ落ちたものが下に行くにしたがって、形を取っております。この下の部分には三日月のように思われるものがありますけれども、それが他の部分に比べれば、はっきりとし



た形を取っております。またこの一番下の下枠の部分ですね、ここの下枠の部分もきっちりとした形を取っております。ともかくこの穴のあたりから下に向かって、いわばこぼれ落ちているもの、あるいはこの部分が下向きの動きを表しております。

そしてこの左手の部分ですけれども、あそこに人間の姿があります。この人間の姿、これは実は女性なんですけれども、やはり頭がありません。これによって一種の動きの方向付けというものがなされております。

この2つの像がまずありますけれども、この部分と全体との関係に注意を喚起したいと思えます。一体これはどういう関係にあるかということです。まず考えていただきたいのは、一番上に大きな枠になっているもの、それから小さい枠というもの、この2つがあります。いわばこれは、この2つでもって、逆に折り返しのできるような関係、力の関係からいいますと、折り返しの利くような関係にある、そういう関係を見ていただきたいです。

この作品の場合にも、さまざまな彫刻成立の途中経過というものが、表されていること。そのことに注意を向けたいと思えますけれども、例えば非常に上のほうですね、この部分は混乱、カオスになっておりますが、片方で女性の像の辺りは、完成度がより高いわけです。それでカオスからこぼれ落ちたものが、徐々にフォームというものを取り始めている。あるいはフォームへと向かいつつある、その状態をこの彫刻全体が示しております。

ここでも先ほどと同じように、彫刻というものはどのように成立していくか、その成立の過程というもの、彫刻の成立の過程が彫刻によって示されているということです。

それでは3つ目のスライドといたしまして、女王蜂Ⅲをお目にかけます。

ここでお分かりのように、まず木板部分に目を向けていただきたいんですが、これは女王蜂Ⅰの場合には、その木の部分にかなり手を加えてありました。2番目のはそれほどではありませんでした。今度の場合には、非常に単純で手があまりかかっておりません。いわば台として、木のある部分から折り取ってきたような形になっております。それに対してこの女王蜂の部分というのは、いわば自分自身が動いていくような非常に具体的な完成に近いような形を取りつつあります。

この3つの女王蜂Ⅰ、Ⅱ、Ⅲというのは、ボイスのいわば典型的なシリーズ制作品でありまして、この段階においては、ボイスは彫刻というものがどのように作られていくか、成立していくか、その過程というものを彫刻で示そうとしておりました。いわばこれは彫刻における進化の過程、あるいは制作というもの、創作というものの進化の過程というものを、彫刻の中に残しておこうという、そういう意図が込められているんだなと思えます。

常にそこには彫刻とは一体何なのかという問いが込められているわけです。それがこのような動きとして表現されてまいります。

この段階で、ボイスにはっきりとだんだん形を取って分かってまいりましたのは、彫刻というものをより深くから理解しなくてはいけないということで、単なる3次元の、外側から見た3次元の何であるというような形での定義ではすまないということでもあります。この場合にボイスにとりまして一番大事だったのは、熱というもの、あるいは熱エネルギーというものがどういうふうに動いていくのか、これは温かみを、あるいは熱を持った素材というもの、これが動きをなしていくうちに形を、フォームをなしていく、このことが彫刻の本質に関わりがあるということ、ボイスは理解し始めたのであります。

なかなかこれは難しい話なんですけれども、この作業を通じましてボイスが発見したのは、これは非常に重要な発見なんですけれども、彫刻という概念、これが実は、何よりも理解されるためには、彫刻の3つの状況、状態というものを理解しておくことが必要である。先ほどの作品にもありましたけれども、そしてそのあとボイスはさまざま言葉を換えて説明しておりますけれども、この彫刻というものは基本的にエネルギーの場であると。エネルギーの場であるというのはどういうことかと申しますと、まず最初には、カオスがあります。このカオスというものがあって、それが動きになり、その動きについて最終的には、きちっとしたハードなフォームというものを得ます。この3つの部分全体を統一したのが彫刻である、そのような認識に到達したのであります。

もう一度整理したような言い方になりますけれども、第一段階というのは混乱の中で方向付けも与えられず、またそれ自身がコントロールされることもなく、エネルギーそのものであります。このエネルギーの混乱状態というもの、カオス状態というものが動きになってまいります。そして、この動きというものが1つの方向付けを得て、形を取ったときに、このハードなフォームというものになります。そして彫刻というものはこの3つの段階すべてに関わりがあるわけです。そして、彫刻が置かれている場というのは、今申し上げましたようにその一番始めの、熱、ないしエネルギーという第1の段階、それを1つの極として、もう1つの極といたしましては、彫刻として実現された、いわば熱に対しまして、寒さ、冷たさ、これがもう1つの極をなします。この間が運動になります。

ただいま図式的に申しましたけれども、これ自身は非常に単純に見えるかもしれませんが、確かに単純ではあります。これをボイスと長いこと、ボイスの作品なり、ボイスの考え方と長いこと取り組んでまいりますと、これが単純な中にいかに複雑な内容が含まれているかということ、それがだんだんに分かってまいります。

ほとんど、いわば、めい想の図であると。めい想、メディテーションに当たると。

これは、いわば一種の進化論というふうにもみることができます。すなわち、これ通訳の余計な注ですけれども、太陽エネルギー、太陽ができる前の宇宙のエネルギーというものがあって、それがだんだん形を取っていきますよね、そのことを頭においてらっしゃると思うんですけれども、進化というものが、まず始めは形を取らないエネルギーがあって、それがだんだんだんに形を取ってまいりまして、最終的にはある熱を持たない物になる、その物になるというのが最終的な形ですけれども、その進化の過程、エネルギーから物へという形を、いわば普遍的な進化のあり方ではないかと、そのように考えることができるのではないのでしょうか。

この3つの状況というものはですね、まずエネルギーから出発してこのような冷たいものに集約していくようなこの過程というもの、この1つ1つどれもが重要でありまして、この3つ全体が1つの調和をなしている、この点が重要なのです。

ですから彫刻というのは、この3つの状況の持つ調和というものを、それぞれももちろんどの辺に立脚するか、主にどの辺に立脚するかは別といたしまして、この3つの状況の調和というものに関わってくるのが彫刻そのものだと、そのように考えたわけです。

ここですでにわれわれは認めることが分かるんですけれども、ここではボイスという彫刻というものが、いわば普遍的な性格を持っていて何もかも含んでおります。従来の彫刻概念で申しますと、これはかなり外れてしまうことになるかもしれませんが、それがボイスの特徴的な考えでありまして、すべてを含むユニヴァーサルな普遍的なもの、その中には生も含まれれば死も含まれますし、また成長という過程も含まれてきます。そのようなすべてを含む彫刻観というもの、これがここにすでに現れていることに注意をしていただきたいと思います。

この図式というものはですね、面白いことにヨーロッパの場合、長い歴史を持っております。これはいわゆる錬金術師のものの考え方と似かよっております。例えば、1つの例としてパラケルススなんですけれども、パラケルススが考えたのは、やはりこれに似ております。パラケルススの考えでは、やはり一番始めのエネルギーの状態、これは硫黄であります。エネルギー、あるいは熱エネルギーの状態というのは硫黄です。それが第2の段階として水銀になっております。そしてそれが最終的に形を取るのが、塩。塩というとピンときませんが、硫酸塩とか私たちが言うときの塩です。あるいは化学反応の結果として1つの形を取ったものです。そういうふう流れていくというのが、いわばヨーロッパの錬金術の考え方なんですけれども、その図式そのものを、いわばボイスは彫刻に当てはめていったわけです。

一番最初のもは、このように彫刻理論の中で普遍性というものがあるということ

す。

ですから彫刻というものが、このような拡大された概念となっているわけです。

ただいまの第1点の普遍性ということと並んでやはり大事なのは、ボイスはここで発見した内容でありますけれども、結局このことを可能にするのは、人間の創造性であると、人間が物を作っていく創造性というものがあるからこそ、これができていくんで、この創造性の発見というものは、ボイスのその後の発展に大事になってきたわけです。

そしてこれはですね、この図式は人間の創造性そのものと関わってまいります。すなわち、それがまた彫刻というものの源泉になるわけですけれども、人間の創造性というものをこの図式と当てはめて考えますと、まず第1のエネルギー状態というものが、人間の持っている意志です。つまり形を持っていません。意志というものがあります。そして真ん中の状況、動いている状況というものが、これが感情です。そして一番最後の行き着く先が、これが思考、ないしは概念化というものであります。

ボイスは実はこの図を使って説明するのが好きでありまして、何度もやりましたけれども、人間をばらばらにして当てはめております。すなわち一番最終段階には人間の頭を書いておりました。真ん中の段階、感情の部分にはつまり、心臓を書いておりました。そして一番手前、一番始めの部分、エネルギーの部分ですが、これは人間の下半身、ないしは足を書いておりました。

これは創造性ですね。上が彫刻です。

そして上にある彫刻というものと、そしてそれから創造性というもの、これが実は同一のものであるということです。

先ほどの女王蜂のあの、ろうの形で表しておりましたもの、すなわちエネルギーから形態へという変化というものですが、これはそのまま人間のレベルに当てはめられていくわけです。

というわけですので、ボイス自身はこれを単なる拡大された芸術概念だと言うだけでなく、人間を含むわけですから、人間学的な拡大された概念であると、そういうふうにも呼んでおりました。

だからこそ、人間は彫刻であるというふうに言うことができたわけです。

もちろん、人間は彫刻であるだけでなく、彫刻を作る人間でもあります。

そしてこのようにフォームというものを最終的には創造していく、そういう存在である人間ですから、やはり芸術家でもあるわけです。

まずそれが普遍的であり、ユニヴァーサルなものだということですね、この、人間は彫刻であると同時に、また彫刻を作る人間であるということ。

これをあまり長いこと議論するつもりはないんですけども、後ほど皆さんと議論するチャンスがあればまたテーマにしますが、とにかくこのような考え方というのはボイスの中心的な、いわば出発点にありまして、確かに 50 年代にできましたけれども、この他さまざまな用語、概念というものをボイスは使っていきますけれども、この根本的な図式、これは最後まで変わらずに残って、さらに発展させられていく図式、ものの考え方としてボイスの出発点となっていたわけです。

世界のこのような彫刻としての本質というものが、人間をして概念へと至らざるを得ない、つまり世界の本質であるところの彫刻、もう一度繰り返しますが、世界の本質であるところの彫刻というものが人間を概念に行き着かせると。

確かに私がここで話していることはきわめて理論的なもので、ピンとこないかもしれませんが、ほんとに大事なんです。50 年代にボイスはこのことを発見いたしました非常なこれに心をいっぱい満たされたわけですけども、片方ではボイス自身にとりましても非常に大きなショックでもあったわけです。

そのためにボイスは非常に大きな危機に陥ってしまいました。

このように 50 年代に彼は、彫刻とは何かということを徹底的に追究していったわけなんですけれども、このような図式というものがだんだんはつきりと生まれてまいりますと、いやでも応でもこの彫刻という概念は、非常に普遍的であり、すべてを含むものである、そして人間自身に関わるものである、人間自身をどうしてもその中に含むものであるということが分かってまいります。そこで彼の問いかけというものは一体これが分かったところで何をすればいいのか、彫刻というものは人間を中心に置くものである。そうしますと、一体人間、彫刻とは何かという問いは、人間を中心に置いてこれから一体何をすればいいのか、この発見が彼にとって非常に重かったわけです。それが彼のこの時代の、この時期の危機の本質でありました。

こうやって彫刻というものの概念が成立してはつきりしてまいりますと、これは、彫刻というものは人間のいわば、実存的な、人間の存在の一番の根幹に関わるものである、そのように理解されてまいります。そうしますとこれまでの美術というものの概念、あるいは彫刻というものの概念、これはその一瞬においては、すべて停止せざるを得なくなったわけです。今までの形の美術というものでは済まない。そこでこれから先どうなるのかというので、今までの美術というものとは一回そこで決別が図ら

れるわけです。

このようなトランスフォーメーションの過程におきまして、結局、彫刻とは何かというこの問いが、結局はその彫刻というものの概念というものを生み出してまいります。そしてこれまでのイメージ、あるいは美術というものがいわば概念という、頭の中の世界の方へと移っていくわけです。この概念という世界に通ずるということは、ある意味で芸術にとりまして、死を意味します。一度これまでありました美学、あるいは美というもの、美術というものがですね、一度ここで拭い去られ、消し去られてしまいます。そして、それが一度消えた後に新しい形というものが生まれてくるわけです。

20世紀、このモデルネ、モダンといわれる時代のこの美術にとりまして、非常にボイスとある意味で比較可能な興味深い人物がおります。この人は彫刻あるいは美術というものの本質を問うに当たりまして、そのイメージ性というものを非常に大事にしておりますけれども、これをいわば概念をイメージによって表現していくわけです。その人はマレーヴィッチという人です。皆さん多分その黒い四角形という作品をご存じだと思いますけれども、ただいまからそのスライドをお見せいたしましょう。これは、マレーヴィッチが20年代に芸術と芸術の理論を探求している時に、芸術概念といったものはこれは一体何なのであろうかと、これを突き詰めていったわけです。この時にこれまでの古いイメージといったものと決別せざるを得ない、これまでのものはゼロである。いわばそのゼロというものの象徴といたしまして、この黒い四角形というものが選ばれたわけです。この黒い四角形というものはですね、すべてのものが古いイメージを、すべてをいわば覆い隠してしまうもの、それを浄化するもの、清らかにするもの、そしてこれは無であります。ただし、新しいものを生み出す積極的な無であると、そのように考えたわけです。

このような体験をしながら、ヨーゼフ・ボイスが作り出した作品がありますけれども、それは先ほどのマレーヴィッチの黒い四角形と非常に関係があります。ただし、それにはいわば現在の大地の上での存在、肉体性というものが備わっております。

この箱は、ですからちょうどボイスの体がちょうどすっぽり納まるようなサイズです。

このいわばイメージのない時代、このイメージの描けない時代におきまして、1つのもちろん死という状況と関わり合うわけですが、人間にそのイメージが投影されますとどうなるかというところのような形を取らざるを得ないということです。

いわばこれが1つの境界線となりました。いわば転回点となったわけです。このように芸術ということと人間というものを捉えますと、人間＝彫刻ということになります。そしてこれ以降のボイスは自分を出す、自分をそのまま彫刻として出す、これが彼の自分の活動として次の段階で現われてくるわけです。

この真ん中の一種の変形、変形の起こる地点でありますけれども、ここから後はいわば外に向かってまいります。そこまでは内へ向かうプロセスです。結局、彫刻とは何か、人間とは何かというのを考えに考えていきますと、あのよう集約されて真ん中の点にくるわけです。しかし、そこで一度1つの点に到達いたしますと転回点になりまして、ここから変形された今度は外へ向ってという動きになってまいります。それがその皆さんから向かって右半分ですけれども、これによりまして彫刻としてのボイス、それが登場してくることになります。

では、だいぶ熱してまいりましたけれども、ここで10分間だけ休憩を取りたいと思います。